

淀川河川敷から見た長柄橋の空襲



坂上 貞夫(さかがみ さだお)さん(83) 昭和7(1932)年 大阪市東淀川区生まれ
高槻中学在学中に、昭和20(1945)年6月7日の第3次大阪大空襲に遭遇し、
長柄橋への戦闘機による機銃掃射や爆撃直後の淀川河川敷を目撃した。6月9日、
石川県へ一家で疎開し、終戦後大阪に帰る。現在は大阪城でボランティアガイドと
して活躍するほか、戦争体験の語り部としての活動も行っている。東淀川区在住。

※本稿は、インタビュー原稿に、後日寄せられた坂上さんの手記を加筆し完成したものです。

昭和20年6月7日 第三次大阪大空襲

淀川河川敷と長柄橋の地獄

私にとっての戦争の記憶は、昭和20年6月7日の空襲です。恐ろしい実態を経験いたしました。昭和20年3月に東淡路国民学校を卒業し、親の勧めで高槻中学(今の高槻高校)を受験、合格しました。高槻中学を受けたのは、大阪医科専門高等学校(今の大阪医科大学)の付属高校のように親が思っていたようです。医者になれば戦争に行かなくていいからという配慮でした。

第1回大阪大空襲(昭和20年3月13~14日)までは、夜になるとゲートルを足に巻いたまま寝たり、家の向かいにあった広さ6畳ほどの防空壕(3家族14人が出入りしていた)で寝たりしていましたが、大空襲以降は毎晩のように警戒警報・空襲警報のサイレンが鳴っていて、毎晩壕の中で寝ることになりました。

6月7日、第3回大阪大空襲の時は高槻中学で授業中でした。「大阪方面に警戒警報が発令されたので大阪市内から通っている生徒は帰途について由（よし）」と先生に言われました。和歌山県潮岬あたりに米軍機が来襲すると大阪地域に警報が出るようになっていました。大阪市内から通っていた私と2人の学生は、すぐに学校を出ました。新京阪電車（現阪急京都線）高槻駅まで行っても電車は止まっていて、駅員に聞くと「国鉄（現 JR 東海道線）も止まってしまった。大阪行きの電車はないよ」とのこと。大淀区中津（現北区）へ帰る友人・福島区野田へ帰る友人と3人で、大阪市内まで約20キロの国道（高槻京都線）を歩いていると、トラックが1台走ってきたので、合図をすると止まってくれました。電車が止まっている事情を話すと「長柄橋の手前まで行くから」とトラックの荷台に乗せて送ってくれることになりました。

後日の資料によると、9時頃に警戒警報が出たそうで、トラックに乗ったのは9時15～30分頃であったと思います。空襲は11時9分からだったようです。

トラックは、まばらな家並みや田んぼ、畑を見ながら国道をどんどん走りましたが、茨木の街中を過ぎ吹田の手前にさしかかったあたり（吹田市七尾付近）から、周囲が燃えているんです。このあたりは田んぼや家が点在しているだけでした。吹田のアサヒビール工場の手前あたりには、道路の両側に木造の2階建ての家や商店が連なっていて、そこが真っ赤な炎をあげて燃えていました。トラックの運転手さんは、燃える中を走るために、車を停めて防火水槽を探し、荷台にあったむしろに水を浸して、それをかぶって燃える火の中を通り抜けました。その間数秒だったか数分だったか。

上新庄に入り、まばらな家屋や青い田んぼの中を走り、鐘紡（カネボウ）中島工場入口手前で降ろしていただきました。鐘紡は繊維工場ですが、当時は飛行機の部品製造をしていたようです。現在は東淡路の交差点のそばの「エバーレ」の名前のマンション群がある集合住宅街です。

運転手に礼を言って車から降り、歩くこと約5分、淀川の土堤に上がりました。11時半ごろだったと思います。赤川の城東貨物線を越えた時、淀川の上を南の方から戦闘機が2機低空で飛んできて、我々のいる東淡路の交差点の上空あたりで45度くらい旋回して西の長柄橋のほうへ飛んでいきました。最初は日本の戦闘機かと思いましたが、それはすぐに機銃掃射を始めたのです。

淀川の堤は砂地なので弾が当たるとパンパンパンという音がして、転々と同じ間隔で砂煙が舞い上がり、3人ほどの人が寝転んだように見えました。多分死んでいたと思います。

はじめて敵の戦闘機だと分かり恐ろしくなり3人は草むらに死んだふりをして寝転びました。数分寝ていましたが再び敵機が来る気配もなさそうだったので歩きだしました。道中は子ども連れの母親、大きな荷物を背負った老人、疲れ切った人々の顔・顔・顔……。河川敷の方を見れば、あちらにこちらに横たわっている人、片足を引きずって歩いている女の人、泣いている男女……。見たことのない光景が目飛び込んできました。河川敷に降りていたら更に地獄絵図を見たでしょう。

しばらく歩いて柴島消防署の前まで来ると我が家の屋根が見え、焼けていないのにホッとしました。友達を待たせて家に走りましたが戸が閉まっていて開きません。そのとき空襲警報解除のサイレンが鳴り響き、しばらくそこに立っていましたら、大きな荷物を何段にも背負った母親と2人の弟が、赤川の堤防のほうからとぼとぼ歩いてきました。無事一家が揃い、一安心して、長柄橋に向かいました。柴島神社の近くから堤防へ抜ける道の途中に、コンクリート製の牛馬の水飲み場がありました。当時は車ではなくて牛馬が主流でしたから、所々に休ませる場所があったんです。そこに、牛が2頭横になっているんです。血が出ていないのに死んでるわと。後で考えてみると、あれは爆風で飛ばされたんだなと思いました。

当時、この堤はさらしの干場でした。柴島はさらし工場が50社くらいあったんじゃないかと思います。織機で木綿の生地を作りますと、幅60センチくらい、長さ30メートルくらいの生地ができるんです。それは最初黄色いので、淀川の流水にさらして白くするという工場がありました。箱舟という四角い船をつかって、さらしを流すんですね。洗ったら堤で干していました。水源池ができるまでは、現在の崇禅寺のライフからキリスト教病院のあたりまでが干場でした。あのあたりは芝生だけのがらんとしたところで、崇禅寺と家がぼつりぼつりと建っているだけの場所でした。

長柄橋の手前まで行って左の河川敷を見ると、堤防にも斜面にも血を流して横たわる人、うずくまる人、それを手当てする身内らしき人々が見えます。河川敷の砂や草は血で真っ赤に染まっていました。また爆弾の落ちた穴が堤防の下に見えました。すり鉢状になっていて、その中に人間が落ちているんです。這い上がるようにするんですけど、砂地ですから滑って落ちてしまうんです。直径10メートル、深さは5メートルくらいあったかな。結構深かったです。堤防を歩く3人にとっては地獄絵図を見るようでした。

橋のたもとへ来ると、今度は長柄橋の北詰のところが燃えていました。鉄筋の橋なのに何でかなと思いました。後日調べるとアスファルトの下の木レンガが燃えていたのだそうです。

橋の手前から橋の下をのぞくとあちらこちらに横たわる人、泣いている子ども…橋の上でも数人が血を流していて手当てをしているような光景がありました。地獄でした。3人は目を背けながら早足で南詰まで渡り、南詰にあった新京阪の長柄橋駅に友人を送り、別れました。別れた友はそれから消息がわからなくなりました。

長柄橋の南詰にあった長柄駅は、今はなくなりましたが、ここから天六駅まで高架になっていました。天六の駅は7～8階建ての新京阪百貨店の2階から電車が出ているという珍しい駅だったんです。千里山行きと四条大宮行き2本のプラットホームがありました。電車は日本一の頑丈な列車だったらしくて、今でも正雀の車庫で保管してあるはずです。

帰りは長柄橋の反対側の歩道を歩きましたが、橋の真ん中が爆弾で大きく陥没して、穴が開いていました。付近には木レンガ、鉄くず、コンクリート等の残骸がむき出しになっていて、遺体が2～3横たわっていました。急いで燃える家屋の炎を避けながら家路につきました。

崇禅寺付近の空襲被害

家に入るなり母親が、組長さんの奥さんが崇禅寺に避難したがまだ帰ってこない、探しに行った息子も帰ってこないの、私にも探しに行けというので、急いで崇禅寺駅の踏切を抜けると、駅近くの家々は延焼、晒しの干場にはあちこちに爆弾の穴があり、焼夷弾が土にささって青い炎を出して燃え、遺体の血で草が赤く染まっていました。またたくさんの方が横たわったり泣いたりしていました。いたたまれない情景の中、あちらこちらを探しますが見当たりません。干場をあきらめ崇禅寺に行くと、赤い炎が今を盛りと燃え上がり近づくこともできません。崇禅寺にも人が避難していましたが、爆弾・焼夷弾・機銃掃射等を受けたくさんの方が亡くなりました。崇禅寺付近の空襲は、淀川河川敷より多大の人的被害を被ったようです。中島惣社にも行きますがやはり同じく燃え上がっています。数体の遺体を確認しましたが見当たらず再度干場を探してから帰途につきました。

その晩の食事、母、弟2人と自分の4人家族は丸膳を囲み無事を喜びました。父は昭和19年夏、中国山西省太原へ出征していました。その晩は空襲の時に母が担いで逃げた風呂敷から布団を出して寝ました。風呂敷には布団のほか、貴重品・さつま芋のつるを入れたメリケン粉の団子、ボンボン掛け時計が入っていました。なぜ時計かというと、公務員の給料が50～60円だった時代に、1台60円もしたそうです。非常に高価なものだったんですね。今では笑い話です。

一家で石川県（能登）に疎開

我が家は、親の里である石川へ疎開することになっていました。6月9日夕方、みな大きな荷物を持ち国鉄吹田駅まで歩きました。国鉄、新京阪電鉄、阪急電鉄等は運休していますが、吹田からは国鉄北陸線が動いていると聞いたからです。8時発の新潟行列車に乗り、朝金沢で輪島（能登）行きに乗り換え、2時頃に疎開先である石川県の能登の穴水（あなみず）に落ち着きました。

疎開中は地元の国民学校の高等科に転校しました。ほとんど授業はなく、教練や防空訓練、また運動場でイモを育てるなどの畑作りの毎日でした。通学の1里（4キロ）が遠くて、授業をサボったりしました。疎開者いじめもありました。

8月1日夜半には富山市が爆撃にあいました。穴水から対岸にあるので空が真っ赤に焼けているのが見えました。大阪の空襲が思い出されました。

8月15日の終戦を知ったのは17日でした。自分の精神的な支えが奈落の底に崩れ落ちるのが分かり、どうすれば良いのか制御できなかつたことを覚えています。

穴水では翌年の3月まで過ごしました。2月に帰阪が決まり、懐かしの家に落ち着くことができました。

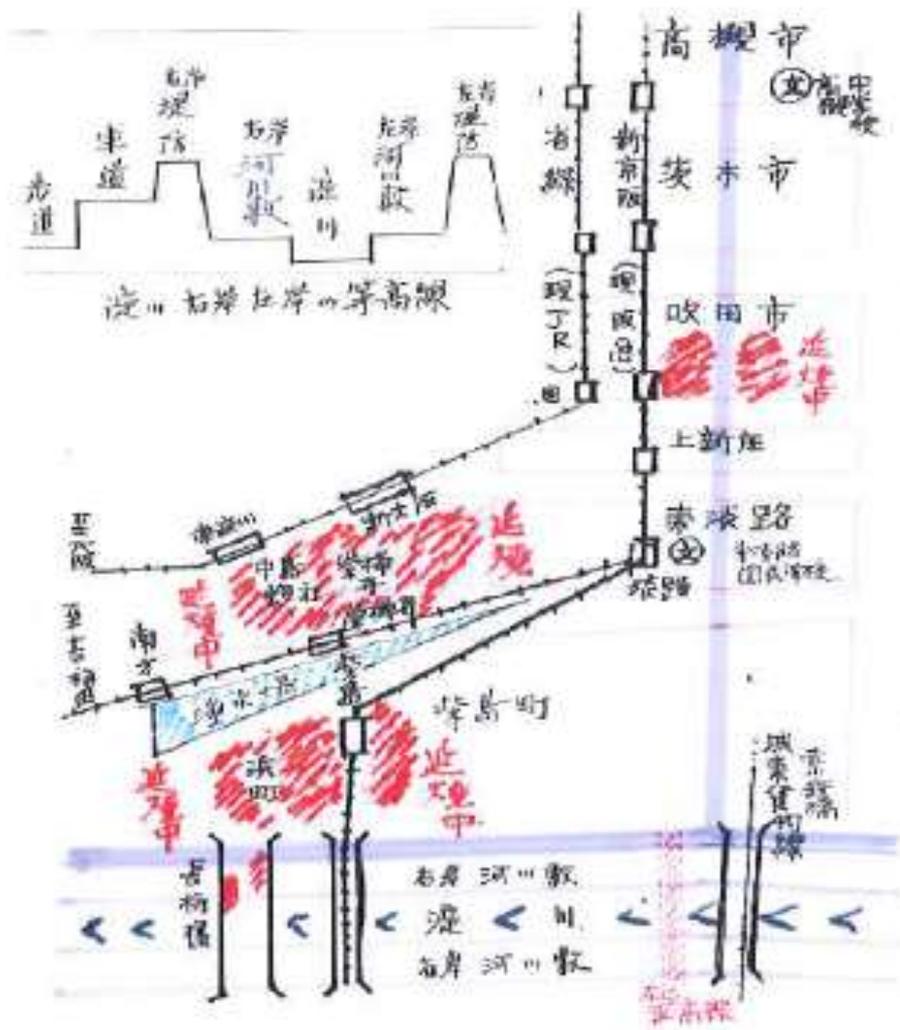
一年遅れて旧制中学をめざすことになり、市岡中学（現市岡高校）を受験することにしました。大阪の府立中学校の帽子には白い線が入れてあり、1本が北野、2本が天王寺、3本が市岡、4本が茨木だったと思います。市岡をめざしたのはこの帽子の3本線と電車で通えるのが目的でした。受験は合格しましたが、北野中学に入学することになり、がっかりしたことを覚えています。

戦後の食糧の買出し

戦後、一家4人の食糧配給では十分食えることができず、週1～2回は闇米を求め買出しに行っていました。行き先は奈良・滋賀・三重が多く、農家へ行って直接交渉です。さつまいも、米、南瓜、その他野菜を、現金もしくは母の着物を持って行って交換しました。終戦から4～5年は苦勞しましたね。ある日、私一人で買出しに行き、近鉄電車・伊勢中川の農家で米2升（2.8キロ）やさつまいも3貫（約11キロ）を買い、電車で名張駅に到着したときです。向かいの電車に乗換えてくれと全員降ろされました。地下道に巡査が5～6人いて荷物検査を受けました。私の番で、食糧統制令違反で荷物の全没収を告げられました。血気盛んだった私は、頭にきて調べた巡査の胸ぐらを捕まえ投げつけたところ、2～3人の巡査が私の体を押さえて手錠をかけられ車で名張署に連れて行かれました。一晩拘束され翌朝無罪放免となりましたが、この件は、同じ電車に乗り合わせていた名張町長の尽力があったそうです。後日名張町長に礼状を出しました。

戦争は、生活のすべてを破壊し、心をむしばみ、苦難の道を歩かされました。食うや食わずの日々で、この世の地獄を見せ付けられました。2度と同じ苦難に遭うことなく、平和に・幸福に、生きることを望みます。

高槻から長柄橋までの経路（坂上さん直筆メモ）



<取材メモ>



戦争体験の語り部もされている坂上さん。取材当日は1945年6月7日の長柄橋周辺の見取り図をその場で描いてくださり、70年前の記憶がいかに鮮烈なものであったかがひしひしと伝わってきました。